

社会に生きる力を

今、学校に行きたくない子どもが一〇〇人に二人ぐらいいるそうです。その子どもたちのために親はどう接したらいいのでしょうか。

二年ぐらい前、ある学校で、体験学習として富士登山を計画しました。子どもの数は約二〇〇人で、保護者との連携、学校職員のバックアップをもとに緻密に実行したそうです。ご存じの通り、富士山は三七七六メートルの日本一の山です。ややもすると、高山病にかかります。また、天災で落雷、落石など不慮の事故も考えられます。

その登山に『学校がらいい』の子どもが父親と参加したそうです。その子どもは、ふだん、家に隠れて、ファミコンをし、テレビを見、漫画を読む生活を送っている状態です。担任の先生が、「夏休みに富士山に登らない？」とそっと手紙を渡したことが参加するきっかけになりました。その日のあくる日から、二日に一回ぐらいジョギングを始めたそうです。

いよいよ当日の朝。本人は迷いましたが、「やってみるよ」と父親に言いました。自己決定です。父親は、本人の意志に任せ、手を貸さず見守るように心がけました。五合目から出発し、山頂を目指しました。六合目から徐々に空気が

薄くなりますので、人のペースに巻き込まれると、当然、酸欠状態になってしまいました。耳鳴りがし、気持ちが悪くなりました。途中で、班員が気を使って休み休み登りました。身体は、だんだん慣れてき、七合目から八合目そして本八合目の山小屋の宿に向かいました。ふだん運動をあまりしていませんので、足はもつれ疲労困ぱいの状態です。途中、また気持ちが悪くなり吐き、ギブアップ寸前です。父親は、背中をさすりながら「諦めるか？」と尋ねると「嫌だ、嫌だ」と主張しました。一〇〇メートル歩くと吐きます。見かねて、最後尾についていた先生が、「ここまで頑張ったからもういいよ。山小屋はすぐだから先生が背負うか？」と言うと、「自分の力で何時間かかってても、人の力を借りずに行きたい」と答えました。

この会話が何回も繰り返されました。その子どもは、着実に一歩一歩登り、やっこのことで山小屋に辿り着きました。そして、山頂で御来光を拝み、無事下山しました。その子どもは、先生に次のような感想を述べたそうです。「この世の中で人間が崇高だと思っただ、山に登ったら人間は自然に勝てない。山から下界を見たら、人間がちっぽけに見える、これからは、学校に行かなくても、父親と相談しながら、自分の道を捜しゆっくりでもいいから歩いて行きたい」と。

この子どもは、大人になった時「強く生き生きと、自分の責任で、自分の人生を切り開いていけるような、生きる力」を富士登山という体験を通して肌で感じたと思われる。

これは一つの事例ですが、『学校がらいい』という、やむを得ない回り道を選んだ子どもには、適応できなかった学校に行かせることを当面の目標にしてはならないのです。もっと長い目でみて、大人になる時に自立できるように、回り道であってもいいから、「社会に生きる力」を身につけることを目標にすべきです。そのためには、まず家庭で十分な安心感を与え、その子どもの弱さも十分理解してやり、かつ支えてやる雰囲気を作りましょう。また、子どもとしてのけじめ、家庭の中の役割、家族の一員としての気配りなどは、他の兄弟姉妹と同じように守らせなければならぬでしょう。そして、その子どもの心の落ち着く方法で、旅行、ハイキング、特に自然と触れ合いましょ。無数の「生きていく喜び」の感動体験が、再び社会に足を踏み出し、自立の力をつけるためのエネルギーになるでしょう。

『学校がらいい』の子どもたちが、大人になった時に、お互いに「いろんなことがあったけれども、あなたも、そしてお父さんもお母さんも成長したね」と笑い合える日がきまうよすに！

青少年健全育成標語の募集

十一月は、全国青少年健全育成強調月間です。市でも「青少年健全育成推進大会」が開催されることになっています。

この機会に、市民の皆さんから「標語」を募集します。

趣旨：青少年が社会における自らの役割と責任を自覚し、広い視野と豊かな情操を培い、非行に陥ることなく、心身ともに健やかに成長することは、市民すべての願いです。青少年の健全育成について、理解と認識を深め、日常的にこれに取り組み、参加し、行動するよう気運の高揚を図ります。

応募方法：ハガキまたはハガキ大

の用紙に作品一点を記載してください。
一人三点が限度です。
応募締切：十月十三日までに市民会議事務局（中央公民館内）または教育委員会に、小・中学生は学校に提出してください。

表彰：成人・高校生・中学生・小学生の四部門に分け、各部門ごとに、優秀・一点、佳作・二点を十一月七日の「推進大会」で表彰します。

主催 都留市青少年総合対策本部
都留市教育委員会
青少年育成都留市民会議

うぐいすホール企画運営委員決まる！

都留市文化ホールの運営や自主事業等に対し、幅広く市民の皆さんの意見を取り入れるために企画運営委員会が発足しました。

この委員会は、先に発足した財団法人都留楽友協会内に設置され、文化団体代表や専門知識者など10名により構成されています。

1回目の会議は、去る7月26日に行われ、委嘱状交付の後、オープニング事業や文化育成事業等具体的な検討に入りました。委員の皆さんは次のとおりです。

(順不同、敬称略)

- 澤田洋一 ホール建設懇話会委員
- 遠藤静江 文化協会
- 堀内国男 文化協会
- 大森長彦 都留二中吹奏楽部顧問
- 中村 崇 大学文化会
- 杉本雄二 楽器店経営
- 山本孝治 元新聞記者
- 奥秋延子 婦人団体連絡協議会
- 志村吉彦 都留青年会議所
- 渡辺幸子 市社会教育課長